第39回技能五輪国際大会（静岡）

技能五輪メダリストの群像

ものつくり日本を支える若者たちの挑戦

西澤紘一

（前 技能五輪国際大会日本国技術代表）

オプトロニクス社

技能五輪メダリストの群像

ものつくり日本を支える若者たちの挑戦

西澤紘一

（前 技能五輪国際大会日本国技術代表）

オプトロニクス社

技能五輪メダリストの群像―ものつくり日本を支える若者たちの挑戦―

「技能五輪メダリストの群像」　もくじ

はじめに……1

左官　ザンクトガレンの屈辱をそそげ　―左官一家の大きな夢―
株式会社いりやまと、新潟県立魚沼テクノスクール　堀　美幸……15

石工　日本！二十年振りのメダル　―野球少年がのぼった舞台―
上新石材店、職業訓練法人岡崎技術工学院　浦田祐希……27

洋菓子製造　ホスト国の心意気を示せ　―洋菓子のシンデレラ―
学校法人三星学園 にいがた製菓・調理師専門学校 えぷろん　大島千奈……39

情報ネットワーク施工　悔しさが原点　―光ファイバー王子の戦い―
株式会社協和エクシオ　山口雄基……51

電工　主催国優勝の伝統を守れ　―電工貴公子、世界への挑戦―
株式会社きんでん　堀井裕貴……63

造園　悲願のメダルを！　―あうんの呼吸・絶妙の男女コンビ―
小杉造園株式会社　早乙女彰将・渡邉久美奈……75
建築大工　お家芸復活か　―寡黙な職人の戦術―
住友林業ホームエンジニアリング株式会社　池田通憲……87
ポリメカニクス（精密機器組立て）
〝八連勝〟の重圧をはねのけて　―彗星のように現れた若大将―
セイコーエプソン株式会社　畑　弾手……99
配管　メダルを確保せよ　―配管哲人の美学―
株式会社千代田設備　遠間潔寿……111
製造チームチャレンジ　チームワークの極致　―デンソー最強トリオが挑む―
株式会社デンソー　濱口　覚・伴　雅広・加賀谷一義……123
移動式ロボット　次期公式競技に向けて　―促成ロボコンコンビの軟と硬―
株式会社デンソー　山本哲也・萩野幸弘……135
抜き型　新モールド競技最初のチャンピオン　―おっとり男の金メダル―
株式会社デンソー　安達裕喜……147
自動車板金　最短での世界一　―集中力の権化―
トヨタ自動車株式会社　水野峻吾……159

ＩＴ／ＰＣネットワークサポート　パソコンオタクに大変身　―奇跡のメダリスト―
トヨタ自動車株式会社　中山隆生……171
木型　日本の伝統技を守れ　―情報工学からの華麗なる転身―
トヨタ自動車株式会社　今﨑智也……183
機械組立て　半世紀を超える技の伝承　―孤独を楽しむヤスリ名人―
株式会社豊田自動織機　土谷幸司……195
電子機器組立て　金メダル奪還の道　―鬼才電子オタクの神技―
日産自動車株式会社　清水　輝……207
自動車工　メダル獲得の条件　―頭脳と体力のスーパー職人―
日産自動車株式会社　森山恵介……219
溶接　自然体で世界へ挑戦　―気まぐれ天才職人―
株式会社日立製作所　小林真己……231
構造物鉄工　普通科高校からの大跳躍　―勘違いのメダリスト―
株式会社日立製作所　坂本昭仁……243
機械製図／ＣＡＤ　ＣＡＤの伝統を守れ　―イケメンＣＡＤ名人―
株式会社日立ハイテクノロジーズ　大須賀孔明……255

ＣＮＣ旋盤　同級生とのプレイオフ？　―旋盤の熱い達人―
株式会社日立ハイテクノロジーズ　藤本アキラ……267
ＣＮＣフライス盤　日本のお家芸十五個目の金メダル―フライス盤のクールな達人―
株式会社日立ハイテクノロジーズ　海老根章友……279
曲げ板金　上手の手から水がこぼれる　―負けず嫌いのジェントルマン職人―
マツダ株式会社　秀島　巧……291
あとがき……303
付　録
（付録１）第三十九回技能五輪国際大会（静岡）日本選手成績……310
（付録２）第三十五回～第三十八回技能五輪国際大会 日本人メダリスト……311
（付録３）技能五輪国際大会と日本選手の参加・入賞状況……312
（付録４）技能五輪国際大会・職種別日本選手入賞状況……314
（付録５）技能五輪国際大会関連及び本書関連企業等ＵＲＬ……317

（本書では、所属会社名の五〇音順、同じ会社の中では職種番号順に掲載した。）

はじめに

技能五輪メダリストにインタビューをしたいとの思いが募っていた。二〇〇一年技能五輪国際大会日本国技術代表に推されて六年、二〇〇七年第三十九回技能五輪国際大会（静岡）は私にとって最後の舞台であった。十六個の金メダルを含む二十四個のメダルを獲得し二十八名のメダリストを誕生させた。ホスト国として面目がたった大会でもあった。これまで技術代表として、選手と直接接触する機会は極めて限られていた。ましてや国内大会とは一線を画していたために国際大会候補選手が決まったこともあとから知らされていた。技能五輪のメダリストに直接会って、これまでの苦労と競技会での技の極致について取材したいという思いは、大会が終わり落ち着きを取り戻すにつれて高揚してきた。

ある日、親しい出版社社長上野氏に思いの丈をぶちまけたところ、協力をしようと申し出てくれた。当初、「技能五輪メダリストの品格」というタイトルでどうかと持ちかけた。彼は、いったん良いタイトルだと言ってくれたが、翌日、「先生、品格はまずいと思います。ネット

で調べたら二八〇件以上のタイトルが出てきました。藤原氏の国家の品格に始まり、最近の坂東氏による女性の品格、親の品格まで様々な品格タイトルがありますよ」。これを聞いて、自らの不明を恥じるとともに、絶対「品格」は使うまいと心に決めた。そのあと、「技能五輪メダリストの群像」というタイトルを提案した。二十数年前の堺屋太一氏のベストセラー小説、「峠の群像」を思い出したからである。元禄時代の忠臣蔵事件を題材に共通の目標を共有して戦う義士たちの歴史ドラマであった。群像には、価値観を共有する仲間との意味が含まれている。技能五輪の仲間である選手もエキスパートも送り出す企業団体も支援する雇用能力開発機構や厚生労働省も、金メダルを目指して価値観を共有して戦う仲間であることに思いついた。「群像」で良いかと上野氏に問いかけると頷いてくれた。単行本のタイトルは極めて重要な要素である。いわゆるキャッチと言われて、一目で読者を引き付ける魅力が大事である。数年前の「品格」がその例である。いくら内容が良くても硬いタイトルでは誰も手に取ってくれない。読んでもらえなければ、すべてが無に帰する。

「メダリストの群像」は、技能五輪の世界に集うすべての仲間へのメッセージである。と同時に国の内外に向けて発信したい強いメッセージでもある。このタイトルで出版することに決めた。

第三十九回技能五輪国際大会（静岡）の概要

二〇〇七年十一月二十一日の夕刻、沼津キラメッセでは技能五輪旗が日本代表からカナダ代表に引き渡された。十一月十四日から始まった第三十九回技能五輪国際大会は、若い技能者の熾烈な競技大会の幕をこの日で静かに閉じた。思い返せば、二〇〇三年スイス・ザンクトガレンでの第三十七回技能五輪国際大会から始めて丸四年に渡る準備を終えて迎えた大会であった。四十六カ国、四十七競技種目、八〇〇人を超える選手、同時開催のアビリンピックを加えると三〇万人に近い見学者を集めた史上最大の大会であった。風光明媚な富士の裾野、人情厚い地元の受け入れ、周到に準備された競技会場と運営など顧客満足度の高い大会であった。日本選手の活躍は冒頭に述べたとおりである。一九七〇年第十九回技能五輪国際大会（千葉）での金メダル十七個には、一個およばなかったが、過去最高に近い成績であった。

メダリスト達は、一夜にしてヒーロー、ヒロインになりその後、ＴＶ、新聞から取材攻勢を受け、また各団体からの表彰を受けた。これまでの苦しい訓練に堪えてきたことを考えれば当然の報酬であろう。しかし、彼らの栄光を獲得するまでの足跡をたどり、彼らが目に見えないところでどれだけ努力をしてきたか、家族を始め、どれだけの人々が彼らを支えてきたのかについては、あまり知られていない。

華やかに脚光を浴びた姿からは想像ができない高揚の丘や不安の谷があっただろう。大量メダル獲得に酔いしれている今こそ、彼らの努力の跡と彼らを支えた人々の歴史を記録しておきたいと思った。今回の技能五輪で表現された人間の四肢五感を駆使する技のすごさ、美しさを反芻し、

またものつくりの面白さ、素晴らしさを描き出したいと願っていた。普段の私たちは、技の結果しか目にすることはできない。高性能の自動車を作るために投入されている匠の技の数々、造園や洋菓子製造に見られる職人技を直接目にすることはない。その技のエッセンスを描き出してみたい。そして若い人たちのものつくり離れに対する歯止めの一つになればと筆を執った。

日本選手の競技成績

巻末に詳細な結果を示すが、今大会で我が国は、合計十六個の金メダルを獲り国別金メダル数で世界一となった。機械系十三種目で十個の金メダルを獲り、メダルが取れなかった職種も惜敗でいずれも敢闘賞を得ている。ほぼ完勝である。二位は、韓国の十一個である。韓国は、万遍なく各職種で好成績を取った。韓国に次いでブラジルの健闘が光る。ブラジルは、ＢＲＩＣｓの一角を占め今後の成長を示唆する数字であった。日本は、電気系でも久し振りに電工や電子機器組み立て、デモ競技であるが移動式ロボットで金メダルを獲得した。工場電気設備でも敢闘賞を取りこの部門も完勝である。最近メダルから遠ざかっていた生業系の職種でも大健闘した。洋菓子製造と造園で金メダル、配管と建築大工、左官で銀メダル、石工で銅メダルとすばらしい活躍であった。さらに洋菓子、造園（二人競技職種である）の一人、左官の三職種は女性である。また洋菓子の大島さんは、ベストオブネーション賞を取り、日本の全メダリスト二十四職種中、最高得点を獲得した。情報通

信五職種は、ハード系の完勝とソフト系の惨敗と明暗を分けた。ハード系は、情報ネットワーク施工の金メダル二連勝、ＩＴ／ＰＣネットワークサポートは初めて銀を獲得した。

国際技能五輪とは？

一九四六年、まだ第二次世界大戦の傷跡が生々しく残り混乱が続いていた欧州の西端にあるスペインで一人の男が立ち上がった。Olasoである。戦後復興の鍵は、若い人への職業訓練からはじまると主張し戦後初の職業訓練センターを作った。その後Albert Vidalが引き継ぎ、一九五〇年ポルトガルとの間で職業訓練の結果を競う競技大会を開いたのが技能五輪の起源だと言われている。最初の競技参加選手はわずか十二名だったそうだ。一九五三年からドイツなど数カ国が参加し国際競技大会となった。そのとき設立された国際組織、ＩＶＴＯ（International Vocational Training Organization）の初代事務総長がAlbert Vidalである。彼の功績を記念して、国際技能五輪大会で最も優

内閣総理大臣表彰を受けた静岡国際大会の日本人技能五輪メダリストたち

れた成績を残した選手にAlbert Vidal賞が贈られることになっている。二〇〇三年からＩＶＴＯはＷＳＩ（World Skills International）と名前を変え現在に至っている。巻末の資料に示すように一九五三年から、二年ごとに世界各国で開催されるようになった。国際技能五輪大会に日本選手が参加したのは、一九六二年（昭和三十七年）のスペイン大会であった。そのときはわずか八名で参加し、金メダル五個、銀メダル一個を取って世界を驚かせた。それ以降、回を重ねるごとに金メダル獲得の常勝国となり一九六〇年から一九七〇年代にかけて世界に冠たる地位を築きあげた。この地道な努力がやがて一九八〇年代わが国が国際競争力ナンバー1に立つ源泉となった。その後九〇年代に入ると、生産の国外移転、輸入の拡大など日本の製造業にかげりが出始めた。と同時に国際技能五輪大会で金メダルが取れなくなってきた。代わって金メダルの獲得数を急増させてきたのが韓国、台湾である。しばらくするとこの二国は、世界の生産大国の地位を日本から奪っていたのである。

技能五輪の成績と国際競争力は、不思議な相関を持っている。少なくとも技能五輪で機械・電気関連種目で多くの金メダルが取れなくなってくると、国際競争力が低下してきた。

九〇年代、技能五輪国際大会での金メダル獲得数が激減したが、二〇〇五年ヘルシンキ大会から復活の兆しが出てきた。その時取った五個の金メダルは、スイス、イタリアと並んで同数であったが参加国中最高の数であった。今回、主催国競技を含めると十六個の金メダルを取り、二位韓国の十一個を大きく引き離した。しかも機械系、電気系職種でほぼ満遍なく金メダルを獲得し、ものつ

くり大国への復活を果たしたと言って良い。九〇年代半ばから下降の一途を辿ってきた国際競争力も復活してくると期待を抱かせる結果となった。

この本に出てくる技能五輪大会は、毎年開催される国内大会と二年ごとに開かれる国際大会に分類される。従って、国際大会は前年に行われる国内大会の優勝者が出場することになる。ただし、国際大会開催年に満二十二歳以下が出場条件となっており、国内大会で二十二歳に達した選手は、たとえ優勝しても国際大会への出場資格がない。従って、二位の選手が繰り上がることになる。

現在の技能五輪国際大会運営の国際組織は、ＷＳＩ（本部オランダ）であるが、公平、透明、誠実を謳った大会に衣替えされたのは、最近である。メダルの価値が高まってくるとどうしてもメダル至上主義がはびこり、ルール無視が目立つようになってきた。メダル至上主義が頂点に達したのが、二〇〇一年第三十六回技能五輪国際大会（ソウル）であった。そのときの技術副委員長で

第39回静岡国際大会での表彰式の様子

左から技術委員長リアム・コーコラン、アイルランド首相アハーン氏、筆者（アイルランド・ダブリンにて）

あったリアム・コーコランが改革に乗り出し、競技運営の品質マネージメントシステムを導入した。このシステムの企画・推進役であったのが、筆者の前任である職業能力開発総合大学校電気システム工学科教授中野伸弘氏であった。以降、第三十七回ザンクトガレン大会、第三十八回ヘルシンキ大会と競技運営の品質管理システムが改良改善され、今回の第三十九回静岡大会でほぼ完成の域に達した。今大会ほど、誠実、公平、透明性が尊重、確保された大会は過去に存在しなかった。今更ながら中野氏の先見性と努力に頭が下がる。

ソウル大会以来、リアムとは肝胆相照らす仲となった。お互いに行き詰った時は、会って話すとすべてが氷解する。ミスター・ワールドスキルズとも言うべき誠実な男である。

国際大会の年表は、巻末に示すが、第一回国内大会は、第十二回技能五輪国際大会（ダブリン・アイルランド、一九六三年十月）の予選会として同年一九六三年五月に東京で開催された。その後第二十八回大会（一九九〇年）までは、東京・千葉で開催されていた。第二十九回大会（一九九一年）から中央職業能力開発協会と県との共催で開催されるようになり、最初名乗り

を上げたのが愛知県であった。その後も地方開催方式が二年ごとに採用され、第三十二回大会（一九九四年）富山県、第三十四回大会（一九九六年）島根県、第三十六回大会（一九九八年）群馬県と続いた。その後第三十七回大会（一九九九年）静岡県以降、毎年各県で開催されるようになった。第三十八回大会（二〇〇〇年）埼玉県、第三十九回大会（二〇〇一年）福島県、第四十回大会（二〇〇二年）熊本県、第四十一回大会（二〇〇三年）新潟県、第四十二回大会（二〇〇四年）岩手県、第四十三回大会（二〇〇五年）山口県、第四十四回大会（二〇〇六年）香川県、第四十五回大会（二〇〇八年）千葉県と開催されてきた。また、偶数年に開催された全国大会の優勝選手は、原則として翌年に開催される国際大会への出場権を得ることになっている。この本に出てくる岩手大会、山口大会、香川大会は、全て技能五輪全国大会を意味しており、特に第四十四回全国大会（香川大会）は、二〇〇七年静岡で開催された第三十九回技能五輪国際大会の予選会の性格を持っていたのである。

日本提案新職種（Telecommunication Distribution Technology：情報ネットワーク施工）の提案と公式職種化への苦労

今回二連勝を果たした情報通信配線技術（Telecommunication Distribution Technology：情報ネットワーク施工、以降ＴＤＴと呼ぶ）は、日本が発案した新しい競技職種である。詳細

は本文で紹介するが、その誕生の経緯を明らかにしておきたいと思う。

二〇〇一年筆者が技術代表になったときから日本発の新しい職種の提案をしたいとかねがね思っていた。与えられた職種定義の中で最善を尽くしてメダルを取ることも必要ではあるが、自らが職種定義を提案し、各国の賛同者を得て国際競技として発足させることは、技術代表としての醍醐味である。そこで、筆者の専門でもある光ファイバ施工技術の新職種を二〇〇二年オークランド総会で提案した。一部の賛同を得たが、そのときはほとんど無視されるに等しかった。日本に戻り、関係者と話す中でブロードバンド光回線が立ち上がりつつあった二〇〇二年後半くらいから面白いといってくれる専門家が現れた。そこで、日本国内で通信配線技術を技能五輪種目にすべく関係者の説得に当たった。二〇〇三年になると通信建設会社も興味を持ち始め九月には、創業サポートセンターで通信配線技術を技能五輪の新種目とすべくシンポジウムを開催した。その結果、翌二〇〇四年一月、ＮＰＯ高度情報通信推進協議会が立ち上がり、後に技能検定「情報配線施工」を実施する団体として認可を受けることになる。二〇〇四年四月、横浜パシフィコにて、レーザ展示会（レーザー学会）とＮＰＯの共催で情報通信配線技術フォーラムと銘打って、第一回の国内競技大会を実施した。一〇〇人を超える選手、数千人の見学者を集め、大いに盛り上がった。この結果を持って、二〇〇四年五月ザンクトガレン大会に臨んだ。技術委員会で、メタル配線、欧米で多いＣＡＴＶ用同軸配線を加えて、ＴＤＴ競技として再提案した。コーコラン技術委員長も斡旋の労をとってくれて、アドホック委員会を主

宰して日本案の趣旨説明を充分する機会を作ってくれた。このとき十カ国以上の代表が参加してくれて大いに意を強くしたものである。職種定義やインフラリストなどをそろえて、二〇〇四年五月の香港総会に臨んだ。ここで、二〇〇五年のヘルシンキ大会での競技職種の概要が決まる。デモンストレーション競技として登録してもらうためには、六カ国以上の参加が必要であった。ヘルシンキ大会の競技参加国候補リストが配布されて集計が行われた。フィンランドの代表から初日の予備登録の結果を聞かされた。何と日本を含めてオランダ、フィンランドの三カ国しかない。このままでは消えてしまう。そこで、巻き返しを図った。二〇〇五年のホスト国であるフィンランドは、北欧のノルウェイ、スウェーデンを誘ってくれた。筆者は、技術代表として親しかったブラジルとオーストラリアに声をかけた。シンガポール代表は、公式競技になったら参加すると体よく断られた。二日目になって、筆者とフィンランドの努力が実って、何とか七カ国が予備登録してくれることになった。これで、デモンストレーション競技として実施できることが決まりほっとした。日本を発つとき、日本での盛り上がりを十分伝えて必ずヘルシンキでデモンストレーション競技にしてくると大見得を切って出てきただけに気が気でなかった。もし、キャンセルとなったら日本に帰れないとまで思い詰めていた。それまであまり親しくなかったノルウェイとスウェーデンの技術代表が神様に見えたのも無理は無い。その後、意気揚々と日本に帰って、ヘルシンキで頑張ろうと報告したが、実際は薄氷を踏む思いであった。二〇〇四年十月技能五輪岩手大会で国際大会へ派遣する選手も決めて、ヘルシン

キ大会の最後の準備技術委員会に臨んだ。七カ国の予備登録があったので安心していたら、ブラジルとオーストラリアがキャンセルしてきた。やはり国内委員会の了解が得られなかったのであろう。五カ国では、一カ国足りない。万事休すかと思っていたら韓国が名乗りを上げてくれた。実は、二〇〇四年の夏、韓国のホン技術代表にソウルで会い熱心に参加を促した結果がようやく出たのである。これで六カ国が確定し正式にデモンストレーション競技として#43の職種番号が与えられた。今回、フィンランドは選手を送ってこなかったが、三カ国増えて八カ国が集まり公式競技となった。次回のカナダ大会では、十ヶ国参加が必要となる。

本文に出てくる専門用語の解説

最後に、技術代表、エキスパートの定義を書いておきたい。この二つの役目を理解していただかないと本文での意味がつかめなくなるからである。

技術代表とは、各国から一人ずつ代表を出し技能五輪国際大会事務局に登録する。一年に一回の割合で開催される国際技術委員会に出席して、二年おきに開かれる国際大会の競技種目の選定や運営方法を議論し決定する役目を持つ。さらに競技大会中は、各技術代表の専門性に従って、四十数職種ある競技の審判長（ジューリープレジデントと呼ぶ）を務めることになっている。

もう一つ公式代表という職務がある。各国一名ずつ代表を選出して事務局に登録する。通常

中央職業能力開発協会から役員が就任するが、国際技能五輪の競技を含むすべての事項を取り扱う戦略委員会メンバーとなる。そのほかに、執行役員として、会長、技術委員長、戦略委員長、財務委員長などが公式代表、技術代表の選挙で四年ごとに選ばれる。

また本文中に、エキスパートと言う特別な言葉が出てくる。文字通り専門家という意味であるが、各国の選手のコーチ、指導者の意味である。しかも競技中は、審査員として、各国の選手の評価、採点をすることになっている。もちろん、職種によっては、自国の選手の評価採点に加われない場合や自国選手への採点を無視されることもある。日本では、一般的に所定の国際大会に出場する選手を出す母体、企業や団体のコーチが選任されることが多い。したがって、選手が代わるとエキスパートも代わることになる。外国の場合は、訓練施設や訓練学校の教員がコーチすなわちエキスパートに選任され、何年も同じ人が務める場合が多い。

国際大会が終了する時のエキスパート会議でチーフと副チーフが選任されるが、二回以上エキスパートを務めることが条件であり、一回ごとに異なるエキスパートを送らざるを得ない日本の場合は、チーフに選ばれることは困難である。ただし、日本が提案した通信配線技術の場合は、職種定義やインフラリストを前もって作っておく必要があったため、職業能力開発総合大学校准教授菊池拓男氏が最初からチーフを引き受けた。今回もエキスパート会議において、満票でチーフに再選された。競技の連続性から考えるとエキスパートは、続けるとことが望ましいし、続ければチーフや副チーフに選出される可能性も高い。課題の選定、選択や競技の実

際の運営などチーフの権限は強く、各国、各職種でチーフを取ろうと努力しているのが現状である。

もう一つワークショップスーパーバイザーという役割がある。競技場の設営と運営に責任を負う役目である。競技場で選手が気持よく戦えるように環境を整備することであるが、競技場に入る選手はもとより、エキスパート、通訳、時には、技術代表などの要求や希望を聞く立場もある。さらには、飲料水の補充や照明の確保、寒さ対策など実に幅広い。そして常に公平性と透明性、誠実性が求められる。競技種目により、数人のアシスタントが補佐する。

通常、選手の派遣企業や所属する業界団体の専門家やその職種に関連する訓練施設の教員がその任に当たる。作業服やはっぴを着た人が競技場内でこまめに動いていたことに気がついた人も多いと思う。今大会では、こうしたワークショップスーパーバイザーの献身的な働きが高い評価を受けた。本文でもその働きの一部を紹介した。

各種目の採点法についても触れておきたい。競技モジュール、技術要素毎に細かい採点項目が設定されている。合計点は一〇〇点である。各競技では平均点が異なるので、五〇〇点を平均としてその標準偏差で規格化する。その結果二点差以内なら同順位とすることになっている。二点以下の差で順位を決めることは、技能の評価にはなじまないのである。したがって、同点メダルが多くなる。

左官

ザンクトガレンの屈辱をそそげ
―左官一家の大きな夢―

株式会社いりやまと・新潟県立魚沼テクノスクール
堀 美幸

http://www.iriyamato.co.jp/
http://www.techno.ac.jp

左官　建築物の仕上げ部門として、建物の壁や天井の装飾性、耐久性を競う。金属パネル上にしっくい塗装をする課題、石膏を用いた造形物を作る課題など内装工事を意識した競技内容である。指定された寸法、塗られた壁の平滑度、全体の美観などが評価の対象となる。

第三十七回　技能五輪国際大会ザンクトガレン大会での屈辱

「あなたは失格よ」。韓国エキスパート（審査員）の通訳の女性から流暢な日本語で心ない言葉が浴びせられた。数人のエキスパートが日本選手を取り巻き始めた。事前に作ってきた石膏加工用モールドが見咎められたのである。メダル確実と言われていた奇才佐藤浩光から血の気がひいた。競技が始まってまだ一時間も経過していなかった。いたたまれなくなった佐藤は競技場を飛び出した。チーフエキスパート（審査委員長）の社団法人日本左官業組合連合会理事・長谷川哲義は、佐藤のエキスパートも務めていたが、その動揺もあらわに、俺も責任を取ってチーフを降りると言い残して競技場を離れた。長谷川のあまりの剣幕に残ったエキスパートは茫然自失となった。

石膏を使って自由にモニュメントやアーチを作る課題は左官競技の華である。年々複雑かつ繊細になる課題に対応できるよう、課題図面から正確に石膏形状を写し取るための特殊なモールドを工夫して佐藤が持参したことを長谷川は知っていた。これまで非公開であった課題をオープン化し、仕様と目的図面だけを指定して、道具や手順については選手自身の創意工夫を期待するのが、チーフエキスパート長谷川の基本コンセプトであった。ところがマイスター制度に護られ伝統技から抜け出そうとしない欧州のエキスパート達は、長谷川のアイデアが理解で

きなかった。佐藤のモールドはまさに画期的なアイデア品であった。それを見たエキスパートたちは内心驚いたに違いない。しかし彼らは、「世の中で買えない道具や材料を持ち込むことはルール違反だ」と主張して譲らなかった。長谷川は、前日に工具展開（選手の持ち込んだ道具や材料に違反がないかエキスパート全員がチェックする作業）をしなかった手ぬかりを悔やんだ。それをしておけば、事前にいくらでも抗弁ができたからである。長谷川と佐藤がいなくなり、振り上げた拳の下ろし方に苦慮していたエキスパート達は、チーフのいない競技にはメダルは出せないと言う大会本部からの通達にようやく我に返った。フィンランドやアイルランドのエキスパートが動き出し、副チーフのドイツのエキスパートが競技場外にいた長谷川に戻ってくれるように懇願した。左官職種の審判長であったマレーシア技術代表のチャンも呼ばれ、日本の技術代表であった筆者も加わり急遽エキスパート会議が開かれた。標準品でないモールドを持ち込んだ佐藤を二〇点の減点として競技を続けさせる案で合意せざるを得なかった。選手を責めるなとアイルランドのエキスパートが言った。長谷川は、選手の創意工夫によるモールドを違反とされることに断腸の思いで無念を呑んだ。

ザンクトガレン大会で左官職種のチーフエキスパートを務めた長谷川哲義

エキスパート会議の結論を得て、佐藤も気をとり直して競技場に戻り作業を続けた。結果は、二〇点という大量減点にもかかわらず四位敢闘賞を獲得した。おそらく普通に競技を続けていれば、ダントツの金メダルであったろうと長谷川は悔しがる。全競技が終わる頃、長谷川は四キロも体重を落としていた。食事も喉を通らないほど佐藤に申し訳ないと思いつづけたからである。これは、二〇〇三年第三十七回技能五輪国際大会（ザンクトガレン）での出来事である。長谷川のショックはさらに続く。二〇〇五年第三十八回技能五輪国際大会（ヘルシンキ）では、十二カ国ルール（十二カ国の参加国が無いと公式競技から外される）で種目そのものが消滅したからだ。第三十五回技能五輪国際大会（モントリオール、一九九九年）に日本が掴んだ金の栄光が遠くにかすんでいた。それから四年間、長谷川の臥薪嘗胆が続いた。

左官競技の復活

二〇〇六年の十一月、東京で開かれた国際技術委員会で、左官競技を主催国職種として実施する案が可決された。チーフはフランス、長谷川が副チーフを引き受けることで日本での第三十九回国際大会（静岡、二〇〇七年）の実施が決まった。年齢制限で、第四十四回技能五輪全国大会（香川、二〇〇六年）繰り上げ一位となっていた堀美幸（ほりみゆき）が国際大会に出場することが決まっていた。長谷川は、静岡大会ではメダルを獲るだけではなく、年々参加国が減少している

過去の左官職種を復活し活性化しようと考えていた。従来の左官競技は、ドイツ語圏の国が主導権を持ち、石膏を使った複雑な形状を幾つも作り、それらを組み合わせて一つの壮大なモニュメントを造形する課題が主であった。左官業の世界も現在では「軽天」と呼ばれる軽量鉄骨を天井にも使う間仕切りボードや、しっくい壁塗装などの内装技術に拡がってきており、参加国を増やすためには石膏芸術品の割合を少し減らす必要があるとフランスのチーフに進言した。彼は、一九九九年国際大会（モントリオール）で銀メダルを獲っていた若い男であった。

2人の兄に続き技能五輪全国大会でメダルをとり、静岡国際大会ではみごと銀メダルを獲得した左官一家の華、堀美幸

左官一家の華

堀美幸は、左官業を営む堀家の末っ子である。二人の兄も左官職人として活躍している。長兄健春は、第四十回技能五輪全国大会（熊本、二〇〇二年）ついで第四十一回技能五輪（新潟、二〇〇三年）で銀メダルを獲り、次兄直幸は第四十三回技能五輪全国大会（山口、二〇〇五年）で金メダルを獲得していた。彼女は、高校を卒業すると兄に次いで、新潟県立魚沼テクノスク

ールに入学した。

同校は過去にも技能五輪選手を何人も育てた名門である。訓練課長の高野雅一に指導を受けることになった。左官業を目指す女性はまだ少なく、新潟からの通学は無理と見た父は、高野に頼んで学校の寮に入れてもらった。二十人ほどの学生の中で堀は紅一点であった。男子寮の一階の一室が彼女用に充てられた。風呂の時間割りなど高野は生活面でもよく面倒を見た。堀は父や兄たちに負けたくないという根性の持ち主だった。

初年度は、しっくい壁の塗装訓練、石膏加工についても繰り返し練習した。香川大会で静岡国際大会への切符を手にしたが、二〇〇七年四月からは株式会社いりやまとに就職が決まっていた。このまま現場に行ってしまえば、世界と戦える選手に仕上げられない。長谷川と高野は入社先の株式会社いりやまと戸川正昭社長に、国際大会まで魚沼テクノスクールで特訓させて欲しいと訴えた。戸川は、「分かった。静岡大会までお宅に預ける」と快諾した。高野は、堀の内定が取り消されることを恐れていた。片や戸川は、ちょうど米国コネティカット州の大邸宅の内装工事に戸川の左官技術が評価採用されたことが頭にあった。今後日本の左官業の世界

会社や左官業の将来も考え、堀の訓練を応援した、（株）いりやまと社長の戸川正昭

戦略のためにも、堀に世界大会の経験をさせようと、内心思いをめぐらせていた。

四月、入社後一週間だけ会社に出て、すぐに学校に戻った。慣れた環境での国際大会に向けた猛訓練は苦にはならなかった。長谷川、高野はザンクトガレンの屈辱を味わった仲間である。静岡での雪辱を胸に誓った。そして一九九九年国際大会（モントリオール）での金メダルの栄光を取り戻したかった。堀は、兄たちが実現できなかった国際大会でのメダルを熱烈に希求していた。選手と指導員、エキスパートの思いは一つとなった。高野は、学校全体を統べる訓練課長の要職をこなしながら、マンツーマンで堀を訓練した。間仕切り内装課題が導入されることを知って、体力を鍛えるよう指示した。堀は時間の合い間をみては、腕立て伏せや懸垂を自らに課した。身体は締まり、筋力が付いた。ドイツに留学した先輩を呼んで、石膏課題の訓練をした。ザンクトガレン大会の幻の金メダリスト佐藤も仕事の合間を縫ってかけつけた。高野は、ありがたいと思った。

選手の状態をよく見、臨機応変に適切な指導を行った高野雅一

ある日、壁に取り付けた石膏の置き引きモールドが落下しせっかくの作品が壊れた。材料の乾燥不足が原因で、堀の不注意だった。高野は壊れた残骸を眺めて思案した。知らないふりをしようか、仕方がないとなぐさめるか、何と馬鹿なことをしたのかと叱るか…。高野は、堀が訓

練に対して少しマンネリ化していることに気が付いていた。そこで第三の方法を選んだ。近くのバケツを蹴り飛ばして、「これまで何を訓練してきたのか、家に帰れ！」。罵声を浴びせた。堀の心に火がついた。涙をこらえつつ黙って破片を拾い集めながら、自分のふがいなさを責めた。それからの堀は、目が覚めたように課題に取り組み始めた。高野の賭けが当たった。

世界大会での戦い

初日にいきなり「軽天」という軽量鉄骨にボードを貼り付ける課題に堀は戸惑った。しかもそのボードを一・八メートルの高さの天井に貼り付けなければならない。

もともと軽天ボード貼り付け課題は、これまで全く未知の領域で、日本の左官職種では実施していない作業だった。そのために高野は、訓練中に軽天課題について専門家を呼んで堀に徹底的に指導していた。堀は、軽天ボードを使った間仕切り壁については訓練していたが、まさか天井に貼るとは予測していなかった。隣のフランス選手を横目に見ながら、これまでの経験をもとにこの新しい課題に取り組んだ。これで三時間ほど余計に時間を使ってしまったが、何とか格好はついた。さて天井に貼り付けるには、相当の力がいる。そこにアイルランドのエキスパートが助け船を出した。天井貼りだけは、エキスパート皆で手伝おう。怪我でもされたら大変だ。

二日目は、五面ある壁に下塗りを施した。次に石膏で作品を作る課題に取り組んだ。今回の課題は、高野が考案し、長谷川の提案した扇型が選ばれた。日本の石膏は、時間をおくと次第に硬化する性質を持つ。したがって、素早い作業と石膏液のコントロールが難しい。欧州の石膏は、流動性がありなかなか固まらない。したがって、作業をゆっくり行っても影響はない。今回石膏作業で欧州の選手が戸惑って何度もやり直していたことは地の利があったと言える。また石膏素材品を既製品と欧州が得意とするオンサイトでの製造品との組み合わせにしたことも日本に有利に働いた。堀は二日目で初日の遅れを、二時間ほど取り戻した。

軽天ボード貼り付け作業

下塗り作業

石膏を使って置き引きを作る

しっくいで綺麗に上塗り仕上げした
壁に置き引きを慎重に取り付ける

三日目は、最大の見せ場である五面の壁の上塗りである。今回採用された「しっくい」を小さなコテで七～八ミリ厚、鏡のように均一にむらなく上塗りをする技術は日本が得意とする技である。欧州は、一ミリ以下の薄い層を一メートル以上の大型のコテで一挙に塗る方法を採用している。これでは、鏡のような面は出ない。各国のエキスパートは日本製のコテの支給を要求した。長谷川は、すぐに全選手に手配した。台湾のエキスパートは参考にしたいとさらにもう一つ要求した。

最終日は、上塗りの仕上げである。時間をかけて丁寧に塗った。鏡のような面が現れた。一年間訓練して成果が出たと思った。日本の壁塗り法は、下地から手作業で一層一層を丁寧に塗って行く。したがって鏡面のように美しい仕上がりになる。一方、欧州の壁塗り法は、壁材をまず鏝の上に乗せ、そして下地へ塗り付け、後で削り取っていくやり方である。これでは平滑な面は出ない。文化の違いがここにもあった。

終了の笛が鳴る五分前に全ての課題を完成させた。これまでなかなか二十二時間以内に収まらなかった作業が本番でできたことに、堀は満足した。

ある時、アイルランドの選手が所定時間内に作業を終えて、そのまま突っ立っていた。長谷

川は、時間内に片付けと掃除をするように指示した。欧州の選手には、後片付けや清掃の習慣がないらしい。その後、彼は、課題終了後に周りをきれいに片づけるようになった。アイルランドのエキスパートは、それとなく注意してくれた長谷川をサポートするようになっていた。

堀は、洋菓子の大島と造園の渡邉といつも一緒に行動した。大会中の緊張感を弛緩させないように三人娘はお互いに励ましあった。そして見事に全員がメダルを獲った。

表彰式で

銅メダル、スイス、次のコールに会場が沸いた。「銀メダル、堀美幸さん、日本！」

金メダルは、アイルランドが獲った。しかし、ザンクトガレンでの雪辱は果たしたと長谷川は目頭が熱くなった。堀は、銀メダルを胸にかけて兄たちの夢が実現できたと泣いた。

左官一家、そして彼女を支えた左官業組合の職人たちは、我がことのように歓んだ。高野もそっと涙をぬぐった。

今、堀美幸は、株式会社いりやまとで現場を

ついに兄たちの夢を実現！

預かって活躍している。高野は、週一回時間講師として堀に魚沼テクノスクールに来てもらっている。彼女の左官技術だけではなく、基礎訓練の重要さ、メダルの重さを生徒に伝えてもらいたいからである。それだけ手塩にかけて育てた逸材だからだ。戦いが終わって、いりやまとの戸川は、期待の星がやっと手元に戻って来たと安堵の胸をなでおろした。そして今後、左官業が内装工事への展開を考えていく上で、堀が今回経験した軽天技術が生きると期待を込めている。

左官職種参加の選手たちと

完成した作品

〔著者紹介〕

西澤 紘一（にしざわ・こういち）

前 技能五輪国際大会 日本国 技術代表、諏訪東京理科大学 機械システムデザイン工学科　客員教授、職業能力開発総合大学校　非常勤講師、工学博士、技術士（応用理学）

1967年京都大学大学院工業化学専攻修了。日本板硝子株式会社へ入社し、以降、オプトエレクトロニクスガラスの研究開発に従事、フォトクロミックガラス、セルフォックレンズ、多成分光ガラスファイバ、光ファイバセンサー、光導波路などの研究開発。1996年より職業能力開発総合大学校　情報工学科教授。2001年から2008年、技能五輪国際大会日本国技術代表。2008年4月より現職。

OPTRONICS eBOOK

技能五輪メダリストの群像

ものつくり日本を支える若者たちの挑戦

著者	西澤 紘一
初版発行日	2007年6月22日
デジタル版	2013年9月12日
発行	株式会社オプトロニクス社
URL	http://www.optronics.co.jp
E-mail	booksale@optronics.co.jp

本作品の一部または全部を無断で改ざん、複製、転載、配信することを堅く禁止します。
また、OPTRONICS eBOOKの利用規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。